元イラク帰還米兵が語る戦場

集団的自衛権行使で、日本が直面する現実とは？

●志葉玲

集団的自衛権の行使を容認する閣議決定が2014年にされた。集団的自衛権を行使するならば、「日米同盟」を理由にアメリカの戦争・攻撃に全面的に参加することが考えられるが、「戦争に参加する」ことをわれほどリアルに安部政権は考えているのだろうか。01年に始まったアメリカによるイラク攻撃に参加した、元イラク帰還米兵のロス・カブーティさん（30歳）のスピーキングツアーが昨年11月に行われた。「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」の志葉玲さんの報告。

安倍政権が解禁を目指す集団的自衛権。それは、日本が攻撃を受けなくとも、米国の都合で自衛隊員が実際に海外で殺し、殺される、ということである。それがいかに深刻な結果をもたらすかを、安倍政権や有権者は理解しているのだろうか。

昨年11月、「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」は、元イラク帰還米兵のロス・カブーティさんを招聘し、東京や大阪など6カ所で講演してもらった。同26日には、元内閣官房副長官補の柳澤協二さんや日本国際ボランティアセンター代表理事の谷山博史さん、イラク支援ボランティアの高遠菜穂子さんも参加して、東京でシンポジウムを開催。130人以上が参加した。

上）空爆で破壊されたファルージャの街の中心部の様子。2004年6月頃（提供 筆者）
下）米兵としてイラクに滞在していた頃のカブーティさん。2004年6月（提供 ロス・カブーティ）

ロス・カブーティさん

モラル障害に苦しむ

シンポでカブーティさんは「保守的な街の育ちで軍隊に入ればヒーローになれると思っていた。（旧イラク大統領の）サダムの独裁からイラクを救うために戦うと信じていた」と米軍入隊やイラク派遣の経緯を振り返り、「非常に浅はかだった」と自省した。

さらにカブーティさんは多くのイラク帰還米兵が現地での経験から帰国後も苦しみ続けていると報告。「罪のないイラク市民を誤って射殺してしまった同僚は、殺された人々の影が自分の寝ゆいつくす悪夢を見続けるようになり、ドラッグに溺れ、普通の生活が送れず、しまいにはホームレスになってしまった。私のいた部隊の半数が薬物やアルコール依存で帰国後1年もたたないうちに除隊した。イラク帰還米兵たちは、PTSDなどから結婚してもすぐに破綻してしまったり、犯罪に走ったりすることが多い。今も1日に20人の元米兵が自殺し続けている。戦争に参加することで、自国の社会にもいろいろな問題が起きてくる」

カブーティさん自身も良心の呵責から苦しみ続けるという「モラル傷害」を抱えていると告白した。

「04年11月のイラク西部ファルージャへの総攻撃は数千人もの住民を殺害した虐殺だった。自分も通信兵として、ファルージャを空爆する戦闘機や軍用ヘリなどに指示を出していた。ファルージャの人々が大きな被害を被ったのは、空爆があったからこそで、責任を感じている」

自衛隊員の自殺

責任という点においては、イラク戦争を支持・支援した日本も人ごとではない。日本で屈指のイラク・ウオッチャーである高遠さんは「イスラム国の台頭に注目が集まっているが、現地の危機的な状況はずっと続いてきた」と語る。「昨年末からファルージャやラマディなどイラク西部に対し、イラク政府が空爆を行っている。現在180万人いるとされているイラク避難民のうち、半数はイスラム国の脅威からの避難民だが、もう半数はイラク政府による攻撃や迫害から逃れている人々」と指摘。「（サダム政権崩壊後の）05年くらいからシーア派主体のイラク政府が、『対テロ』の名目でスンニ派市民を拘束し、拷問の揚げ句殺してしまうということが続いてきた。多くの人々が両目をくり抜かれたり、お腹を裂かれ内臓を抜かれたりして、そうした遺体がゴミ捨て場に積み上げられていたりした。そういう拷問や爆撃が現在も続いていて、私の知り合いも殺されている。日本や国際社会がイラク政府に圧力をかけ、やめさせるべきだった。そうすればイスラム国がこれだけ勢力を拡大することもなかった」（高遠さん）

かつて政府内で自衛隊派遣を指揮した柳澤さんは、イラクから陸上自衛隊が撤退する際に小泉純一郎首相（当時）に進言したことを明かした。「総理には、陸自が1人の犠牲も出さずにすんだのは、1発の弾丸も撃たなかったことにつきること、1発でも弾丸を撃てば、1000発の弾丸が返ってくると伝えた」。また、イラク派遣された自衛官が帰国後25人自殺している件について「恥ずかしながら最近まで知らなかったが、日本の一般の自殺率より1桁多い。これは明らかにイラク派遣への影響だろう」とうっすらと涙くみながら語った。その上で、カブーティさんのモラル傷害に触れつつ「戦争の加害者は自分を許せないという点で心の傷が深刻だろう。そうしたことを考えていないリーダー（＝安倍首相）が推進しているというだけでも、私は断固として集団的自衛権に反対していく」と宣言した。

信頼されているのに

アフガニスタン現地で活動してきた谷山さんは「軍が一度武力行使すれば、どんどんエスカレートし、過激な攻撃で住民を殺すようになると思う。「08年に私たちの診療所近くの結婚式会場に米軍が爆弾を落として48人が死亡し、その中に診療所の所長のいとこがいた。米軍に抗議したが、『いや、タリバンだった』と言い張る。このような犠牲を受けた人々にとのような気持ちの変化があり、それが武装勢力の活動に結びついてしまうか、想像に難くない」

「アフガニスタン本土に陸自を派遣していないことが、日本への信頼につながっていると思う。『私たちが村々を回る時、現地の長老たちは口々に訴えるのですよ。『日本の支援は本当に民間支援だと信じられる。（ISAF（国際治安支援部隊）に参加している）他の国々の支援は軍事的な思惑があるのではと疑ってしまう。信じられるのは日本だけだ』と」

シンポを締めてカブーティさんは「私が日本の集団的自衛権について心配しているのは、日本が米国の攻撃的、暴力的行為に巻き込まれることです」と日本の若い世代に向けてメッセージを送った。カブーティさんら現場からのリアリティーあふれる語は、安倍首相らの主張がいかに戦地の現実からかけ離れたものであるかをあらためて明らかにしたと言えるだろう。